

## チエーザレ・パヴェーゼ『月と篝火』論

——その「アメリカ」の描写に焦点をあてて——

中島 梓

### 序

ネオレアリズモを代表するイタリアの作家のひとり、チエーザレ・パヴェーゼ (Cesare Pavese, 1908-1950)<sup>①</sup> が残した長編小説のなかに、『月と篝火』(原題 *La luna e i falò*, 1950)<sup>②</sup> と題された作品がある。本作品では、その名が明かされることのない、孤児として生まれた主人公が、ピエモンテ州ランゲ丘陵地帯の農村で幼少期を過ごしたのちに、アメリカへと渡り、長い年月を経て久々に故郷へ帰ってきた様子が、現在進行する時間軸のなかに過去の回想を交えるというかたちで、一人称で描きだされている。執筆直後、一九四九年一月一七日の日記のなかで、パヴェーゼはこの作品について「これまでで最高の手柄だ」と記すとともに、自らが手がけてきた一連の長編小説群を整理し、この作品の完成によって「同時代の歴史的円環を閉じた」、「サーガは完結した」と述べた<sup>④</sup>。さらに、翌一九五〇年六月には、『月と篝火』以前に執筆された三部作『美しい夏』(原題 *La Bella Estate*) に対し、イタリア最高の文学賞ストレーガ賞が与えられる。しかし、こうして作家としての円熟期に入った矢先である同年八月、パヴェーゼはトリノのホテルで睡眠剤を多量に摂取し自殺を遂げた。

二種ある『月と篝火』の翻訳<sup>⑤</sup>のうちの、一方の邦訳者である米川良夫は、この作品の興味深い点として、本来的には故郷を持ち得ない孤児が

「帰郷」という設定が用いられていることや、いくつかの時間軸が錯綜するかたちで「戦争」が語られていること、また、物語の主要な舞台のひとつとしてパヴェーゼの文学的故郷である「アメリカ」が取りあげられていること、を挙げている<sup>⑥</sup>。ただ、「アメリカ」が作品の主要舞台のひとつであることがなぜ興味深い点にあたるのかについては、さらに説明が必要だろう。

パヴェーゼの文学作品では、そのほぼすべての舞台が、ピエモンテ州ランゲ丘陵地帯の農村、およびピエモンテ州の州都でもある都会トリノとなつている。丘に囲まれた農村は、パヴェーゼにとって生まれ故郷であり、一方の都会トリノは、パヴェーゼが幼少期に農村から一家で移り住んで以来、自殺に至るまで生活の拠点を置き続けた都市である<sup>⑦</sup>。パヴェーゼは自らの故郷である丘に囲まれた農村と都会トリノ、この二つの世界を舞台にして物語を展開し続けた作家であった。こうした一連の作品のなかで例外的なものとして、パヴェーゼ自身が流刑囚として訪れることとなった南イタリアのブランカレオーネを舞台にした数作品<sup>⑧</sup>と、パヴェーゼ自身が生涯にわたり足を踏み入れることはなかったにもかかわらず主人公にとっての主要な舞台のひとつとして「アメリカ」が取りあげられている『月と篝火』が、挙げられるのである。

ところで、全三二章で構成された『月と篝火』のなかでは、一見、主人公が育った村を離れ最終的に向かった地である「アメリカ」が主人公

の「自己の喪失」を体験する場所として、一方の再び見出される「故郷」は「自己の回復」がなされる場所として、描かれているように思われる。実際、そうした読み方をする研究もある<sup>⑧</sup>。しかし、『月と篝火』第二六章の、主人公が人々の暮らしや営みを想起する場面には、「故郷」と「アメリカ」がともに破壊と再生を繰り返す、同一の性質を担う場所として語られている一節がある。破壊（＝死）の状態に達したものが、ふたたび生へと向かう行為のことを、ここではさしあたり「回帰」と呼ぼう。とすれば、「故郷」と「アメリカ」という性質の異なる舞台がともども回帰的な世界として語られている点に、違和感を抱かずにはいられない。「アメリカ」という表象には、主人公の「自己の喪失」が体现される場所にとどまらない、別の新しい読みを加えるのではないか。

その観点に立ちながら、『月と篝火』における「アメリカ」の描写を考察するにあたり、本稿ではまず、パヴェーゼ作品に共通して登場する「故郷」という設定に着目する（第一節）。また、その類型性を破るように登場する「アメリカ」については、アメリカ文学の翻訳・紹介者としての彼のキャリアが関係していると考えられるが（第二節）、『月と篝火』という作品にその表象が現れるとき、それは題目にも読まれる「月」と、ある密接な関係を結ぶこととなっている。そのことは、同時期の日記や評論、さらには『月と篝火』の原点と位置づけられる詩「大山羊神」などの検証を通じてパヴェーゼが抱いた神話の認識や象徴性へとせまることにより、例証されるだろう（第四節以降）。

### 一・パヴェーゼ作品における主人公の「帰郷」という設定

パヴェーゼの評論を集めた『アメリカ文学およびその他の評論』（原題 *Letteratura Americana e altri saggi*）には、死の約二ヶ月前、一九五〇年六

月一日になされたラジオインタビューの記録が収録されている。このインタビューのなかでパヴェーゼは、登場人物は膨らまずのではなく現実的象徴性のなかで描くべきであること、人物は手段であって目的ではないこと、登場人物は単に主題がリズムとなるような知的な物語の想像に役立つものであるということ、の三点を述べている<sup>⑨</sup>。実際、パヴェーゼの作品ではおおむね、登場人物の心理描写などはほとんどされず、いくつかの典型的なモチーフを散りばめながら叙事詩のように物語が進行してゆく。

また、一九三五年一月一日の日記には、以下のような記述がある。

多くの詩を彩っているのは、家からの脱出だ。それは、すべての色彩、すべての風景を通過した後、喜びをともなった故郷への帰還につながる…<sup>⑩</sup>

故郷への帰還、すなわち「帰郷」というテーマが最初に作品のなかに取り入れられたのは、パヴェーゼが文学者を志すことを決め、最初に完成させた詩「南の海」（原題 *Imari del Sud*）においてである。この詩は先にあげた日記が書かれる五年もまえの一九三〇年、九月七日から一四日にかけて書かれ、後に詩集『働き疲れて』（原題 *Lavorare stanca*）を刊行した際に冒頭に収められた。世界をめぐり、二〇年ぶりに帰郷した従兄、彼の言葉に耳を傾ける僕、その二人がともに丘に登るといって構成で描かれた一〇四行におよぶこの長詩については、パヴェーゼ文学の原点であるとする指摘がすでになされている<sup>⑪</sup>。

パヴェーゼはその後、詩から短編小説、さらには長編小説へと表現の幅を広げた。それらいずれの表現形態においても、「故郷からの脱出」や「故郷への帰還」を中心的なモチーフとして取りあげたパヴェーゼであ

るが、そうした一連の作品のなかで、「主人公」の故郷への帰還をテーマに描かれた作品が、一九四九年、つまり自殺の前年に書かれた最後の二作、「女ともだち」(原題『*Tra donne sole*』『美しい夏』所収)と『月と篝火』である。<sup>⑧</sup>

「女ともだち」は都市トリノが舞台であり、主要登場人物らはすべて女性である。ランゲ丘陵地帯の農村を舞台とする、主要登場人物らがすべて男性の『月と篝火』とは、一見、まったく趣きの異なる作品として捉えうるのだが、ひとたび「帰郷」という設定に目をむければ、両作品には類似性を見出すことができる。

まず、「女ともだち」を見てみよう。この物語は、ローマから故郷であるトリノへと仕事のために久々に戻ってきた、洋裁店で働くクレリアを主人公とする物語である。全三〇章にわたるこの作品中、第四章後半部分には、クレリアが謝肉祭の雰囲気が漂う街を一人で歩き回り、ふいにかつてトリノの街を去ったときのことを回想する場面がある。ここでは、かつて貧しさのために学校にもやってもえなかつた主人公が、ただトリノから脱出したかつた、別の世界に足を踏み入れたいと望んでいただけであつたこと、また、主人公はローマへ渡つて成功したこと、さらには、もう若くないので男というものがどの程度のものなのかを知っているということ、が描かれている。<sup>⑨</sup> また、第一〇章には、ローマからトリノへと帰郷した主人公が、昔の友人宅を訪れ、そこにいた少女にかつての自分の姿を重ね回想を膨らませるなかで、「わたしは出て行きたかつた。こんなにも様変わりし、こんな風に死んだも同然にもかかわらず、それは耐え難いわたしの過去のすべてだつた」と回想する場面がある。そこでは、友人の娘を見た主人公クレリアが、この少女を目にするまでは表面的にすっかり変わってしまったと思われた故郷のなかに、自らの過去のすべてを見出ししている様子が描かれている。

続いて、『月と篝火』を見てみよう。全三二章から成る作品中の第二六章に、主人公が故郷を去つて「アメリカ」へと渡つた過去を回顧する、友人ヌートの会話が読まれる。「きみには勇気があつたんだよ」と告げるヌートに対し、主人公は「勇気ではなかつたのだ。私は逃げ出したのだ」と想起する。<sup>⑩</sup> 孤児である主人公は村に居続けるかぎり、何者にもなることができなかつた。それゆえ、惨めな状況から脱するためにアメリカへと渡つたのだ。この姿は、貧しさから逃げ出すためにトリノからローマへと移つた「女ともだち」の主人公クレリアとも重なる。また、『月と篝火』第二二章冒頭には、「女というものを、わたしは世界を渡り歩きながら知つた。金髪の女、黒髪の女を。——わたしは女を求め、金もずいぶん使つた」とある。これも「女ともだち」で、故郷を去つて男を、つまり異性を知つたクレリアと同様である。

類似点はこれに留まらない。『月と篝火』第二六章冒頭では、それ以前に展開される少年チントとの会話をうけて、「すべてがわたしたちに起こつたのと同じように起こっている」と、主人公が想起する場面が描かれている。そこでは、帰郷によつて、かつての村の人々の生活が表面的には姿を変えつつも今も連綿と繰り返されている現実を主人公が認識する様子が語られるのだが、これは、「女ともだち」の主人公クレリアが、かつての友人宅を訪れ、その娘の姿を見てそこに彼女自身の過去のすべてを見る点と重なっている。

とすれば、「女ともだち」と『月と篝火』は、故郷を飛び出し、さまざまな経験ののちに帰郷する主人公の行動だけでなく、表面的にはすっかり変貌してしまつたかのような故郷が実はなんら変わっていないことに気づくという認識の点でも、おおいに類似した設定を有しているのである。

こうして、「帰郷」という観点での共通点を指摘しうる両作品だが、『月

と篝火』に含まれる「アメリカ」という場所に着目するとき、考察は、次の段階に進まざるをえない。

作家としての人生を歩みはじめて以来一貫して、自身が生涯生活の拠点を置いた地トリノや、生まれ故郷である丘に囲まれた農村地帯を作品の舞台にしてきたパヴェーゼはなぜ、自身が身をおくことのなかった地「アメリカ」を、最後の長編小説『月と篝火』における主要な舞台の一つとしたのか。パヴェーゼの日記や書簡、評論等をいくら繙いてみても手掛かりの得られないこの問いに対して、次節では、アメリカ文学の翻訳・紹介者としての彼のキャリアに着目することで検討を加えてみたい。

## 二. パヴェーゼと「アメリカ」

イタリアでは一九三〇年代以前、未来派によって反アカデミズム・反文学の象徴的作品と紹介されたホイットマンの『草の葉』を除いて、アメリカ文学を手にするのはごく少数の人々、専門家らに限られていた。しかし、一九二九年ボンピアーニ社が創立され、三三年にエイナウデイ社とモンダドーリ社からアメリカ文学叢書が刊行されるようになると、アメリカ文学は研究者の手を離れ、作家や詩人によって盛んに翻訳されるようになる。

すでに高校時代から英米文学に関心を持ち、ホイットマンの詩論を卒業論文で書き上げていたパヴェーゼは、友人が創設したエイナウデイ出版社に英米文学翻訳者として招かれた。こうして一九三〇年代、多くの出版社でアメリカ文学に対する機運が高まるなかパヴェーゼは次々に翻訳を手がけ、また雑誌上で多くの英米作家について論じ人々に紹介するなど、まさにイタリアにおけるアメリカ文学の第一人者として活躍した。

パヴェーゼがアメリカ文学に着目した点について、和田忠彦はパヴェーゼのシンクレア・ルイス論を念頭におきながら、以下のように述べている。

：パヴェーゼは、その地方性と『スラング』を用いた文体に、自身がアカデミックな文学的伝統から逃れる道を見出している。都市<sup>21</sup>地方（農村）という二項対立の中から、「ストラパーエゼ」や「ストラチッタ」のようなイタリアカリカチュアを生み出すのではなく、農村<sup>22</sup>自然、幼年時代<sup>23</sup>過去へ回帰することで獲得される「自由」を描き出す道があると確信したのである。パヴェーゼの眼に、アメリカは、文化的規範となる神話的モデルと映ったのである。

農村<sup>22</sup>自然、幼年時代<sup>23</sup>過去への回帰によって得られる「自由」というテーマは、パヴェーゼが作家になることを志した当初の詩「南の海」のなかにすでに見受けられる。しかし、このテーマがアメリカ文学の発見を通じてはじめて確信へと変わったこと、さらには当時、ファシズム体制による閉塞したイタリアの文化状況にあつて、素朴で力強い文体をもちいて庶民の生活が語られるアメリカが、文化的規範や神話的モデルとしてパヴェーゼの目に映った、ということとを和田は指摘している。

ところが、この文化的規範、神話的モデルとしての「アメリカ」にほころびが見えはじめるのが、一九四七年五月に書かれたリチャード・ライト『ブラックボーイ』論においてである。ここでパヴェーゼは、「アメリカ文学の発見が終わり」、「イタリア人はアメリカ文学を見出し理解したので、もはや新鮮さや驚きを感じるものがなくなってしまった」としたうえで、さらに「アメリカがヨーロッパ化してしまった」と書いている。<sup>24</sup>

いったいなぜこのような心境の変化が起こったのか。それに対する答えは、一九四七年八月三日、ファシズム体制下のイタリア文化と終戦後のイタリア文化について論じられた評論「昨日、今日」に見出すことができる。ここでは、ファシズムという文化的閉塞状況のなかでアメリカ文化に見出すことのできた前衛性が、ファシズムの崩壊と同時に失われてしまったこと、これこそが「アメリカ」の発見が終わりをむかえた理由であると述べられている。

また、先にも取り上げたラジオインタビュー中の以下の発言も注目値する。

：熱心な翻訳期のおわりには、私はまさに、私に認められていない文学上の文体や姿勢が何であったか知っていた。それは、私をよそよそしい者としてとどめ、私を冷淡にさせた。異国情緒にあふれた、思いがけない人に混ぜ入れられ、慣らされるとき、ついにはより孤獨な、より気難しい、ピエモンテのより古い言葉の意味において、より抜け目ない自分を再認識していた。

パヴェーゼはアメリカ文学の翻訳を通じて、どうやらそこに同化しない独自の文体を再認識していたようだが、いずれにせよ、直接的にはアメリカに渡ったことがなかったパヴェーゼのアメリカ体験は、こうして培われた。また、ファシズム体制のなかでアメリカ文学に見出していた前衛性を、ファシズム崩壊と同時に批判的に捉えなおしていた。このような一連の経緯が、『月と篝火』で「アメリカ」が舞台のひとつに取りあげられたことと何らかの関連性を持っていたことは考えられる。

ならば、この「アメリカ」が、具体的に『月と篝火』ではどのように表現されるのか。次節ではこの点を検証してみることにする。

### 三．『月と篝火』における「アメリカ」（一）

『月と篝火』は、孤児に生まれ、作中で名を明かされることのない主人公が、幼少期を過ごした村を去り、「アメリカ」へと渡ったのちに、ふたたび村へと戻りそこで過去を回想しながら、「故郷」を見出す物語である。

全三二章におよぶ本作品のなかで、主人公の「アメリカ」での体験が回想というかたちで主体的に描かれるのが、第三章、第一章、第二章である。すなわち、第三章では故郷から遠く離れた「アメリカ」で故郷に残る親友ヌートの噂を耳にした夜の出来事が、第一章では「アメリカ」の荒野でひとり夜を明かさねばならなかったときの出来事が、第二章では「アメリカ」で出会った女のひとりロザンヌとのエピソードが、それぞれ綴られている。

まずは第三章をみてみよう。ここでは主人公がある夜、「アメリカ」で同郷の者と出会った挿話が描かれている。懐かしさかられた主人公は、同郷の男にビールをやり、禁制のウイスキーを注ぎさえしながら会話する。そしてその男と別れたのち、「アメリカ」まで来る必要はあったのか、この先どこへ向かえば良いのかと不安に駆られるのだった。その先、主人公は「アメリカ」について次のように想起する。

あの国は広大で、みなの方があった。女がいた。土地があった。金があった。だが、誰一人として十分には持っていなかった。誰もが持っているわりには休まずにいた。草はらも葡萄畑も、まるで駅の花壇のように見せかけの、あるいは荒れ放題の乾ききった土地、鉄くずの山のような、あたかも公園のような姿だった。人があきら

めて頭を置き、「それでも私を知ってください。それでも私を生かしてください」と言える場所がないのだ。これこそが人を不安にさせることだった。

故郷では孤児であるために何者にもなれず、安心して根を下ろせる場所を見つけないと逃げるようにして「アメリカ」へと向かった。しかし、そこですら主人公は根を下ろすことができなかった。さらなる不安に追い込まれる主人公、また主人公と同様の不安に駆られながらもそこに生きる人々の姿、根をおろせないがゆえの不安から生じる悲劇が、この章では描かれている。

これと類似した描写は、第二章にも見てとれる。ここでは、前半部分に、主人公が故郷を出て最初に訪れたジェノヴァで、主人公の女中からいつしか恋人になったテレザとの挿話が綴られ、章の半ば以降に、ジェノヴァに飽きてさらに遠くを目指した主人公が「アメリカ」へと渡り、そこで出会った女ロザンヌとの挿話が綴られている。ロザンヌは、どことも知れない小麦の国から映画雑誌あての紹介状をもってやってきた、金髪で、背の高い、しゃがれ声の女だ。彼女が望むのはただひとつ、主人公とともに海岸地方に戻り、そこでイタリア風の店を開くこと、そして誰かが彼女を見かけて写真に写し、やがて色刷りの新聞に載せてもらう、そういうチャンスを手に入れたいことだった。しかし、主人公にはふたりのあいだに子どもが生まれても、結局は別の孤児が生まれることが分かっていた。ある日突然、ロザンヌは故郷へ帰ると告げ、彼のものを去る。一度金を送って欲しいと彼女から連絡があるものの、その後は音沙汰のないまま、ふたりの関係は不毛のうちに終わる。

他にも、久々に帰郷した村で主人公が「アメリカ人」と呼ばれていることや、主人公がノートに、「アメリカではみなが孤児だったよ」と語っ

ている箇所も注目に値するが、いずれにしても、孤児であった過去をもつ主人公にとって「アメリカ」は、憧れを抱いてそこに渡り、その「世界の最後はて」、「最後の岸」に達してもなお充分に根をおろせる場所を見つけない、すなわちデラシネの地として描かれている、と言えるのではないだろうか。

実際、このデラシネ（「根を抜く」の意）についてはすでに、本作品の第一章、主人公が帰郷した場面で「故郷」について次のように彼が述べるときに、暗示的に語られているものである。

故郷はなくてはならないのだ。たとえ出て行く欲びのためにせよ。故郷とは、一人ではないということ、人々のなかに、草木のなかに、地面のなかに、何かしら自分と同じものがある、そこにいなくても自分を待っているということが認識できるものなのだ。

ところが『月と篝火』第二十六章冒頭、村に生きる人々の暮らしや営みが、表面的には姿を変えつつも、今もまったく変わっていないことを新たに主人公が認識する場面に、次のような描写がある。

：長年にわたって経験され記憶に刻まれた多くのことがらが、こうして一夜のうちに跡形もなく消えてしまうことを思うほうが、よりいっそう辛かった。いや、そうではないのか。この方がよいのかもしれない。すべてが枯れ草の篝火のなかに消え去って、人々がやり直す方がよいのかもしれない。アメリカではそうだった。家や仕事、場所に飽きたら、変えてしまうのだ。あそこでは居酒屋や役所、商店が並ぶ村々が、まるで墓場のように空っぽなのだ。（傍線は引用者による）

ここにはもはや、「故郷」と「アメリカ」の間に存在するはずの対比は存在しない。前者もまた、何もかもを破壊し尽くしたのちに初めからやり直す、破壊（＝死）と再生が繰り返される場所として語られている。そして、その描写を成立させる要素として機能しているのが、ほかでもない「篝火」なのである。

ちなみに、ここに登場する「篝火」とは、主人公が帰郷した村に伝わる古くからの伝承を指しており、具体的には『月と篝火』第九章前半、主人公が過去の自分の姿を重ねる少年チントとの会話や第九章中盤、親友ヌートとの会話のなかに登場する。聖ジョヴァンニの夜、畑のそとで丘全体が燃え上がるほどに火が焚かれ、焼け跡が残された土地には、かえって水気が多く味の良い収穫が得られるという「篝火」の伝承、および、満月のときに松の木を伐ると虫に喰われ、樽は月の若いときに洗わなければならない、接ぎ木は新月のときにしなくてはならないという「月」の伝承は、ともに本作品の題名ともなっている。

そして世界を見てきた主人公は、久々に戻ってきた村でチントやヌートと語り、この伝承に触れる。実際のところ、いちどはそれをひどい作り話とさえ捉える主人公だが、第九章末尾では、八月の太陽に灼けた土の匂いのする葡萄畑を歩き、丘を見渡しながら、この伝承について次のように想起するのである。

わたしは愚かだ、と言った。二十年もの間、わたしは村を離れているが、この土地はわたしを待っている。(中略) 月や篝火の話も、わたしは知っていたのだ。ただ、それを知っているのかどうかもはやわからなかったのだというということに、わたしは気づいていた。<sup>②</sup>

(傍線は引用者による)

この箇所は、先に引用した『月と篝火』第一章冒頭で、「一人ではないということ、人々のなか、草木のなか、地面のなかに何かしらおまえと同じものがあって、そこにいなくても自分を待っている」と語られた「故郷」が、はじめて主人公にとってそのようなものとして認識された瞬間と位置づけることができるだろう。

主人公とチントやヌートとのあいだで交わされた会話のなかに登場し、主人公が自らの「故郷」を認識する際にも重要な役割を果たす「月」と「篝火」の伝承。この「篝火」が焚かれる「故郷」と、根を下ろすことのできない主人公がさらなる不安に駆られる地、すなわちデラシネの地「アメリカ」が、ともに破壊された後にふたたびはじめから作り変えられる、回帰的な世界観のもとで語られているのはなぜか。言い換えるなら、「アメリカ」の描写のなかには、デラシネのアレゴリーとはまた別の、新たな読みを加えることができるのではないか。

#### 四. 『月と篝火』における「アメリカ」(二)

この問いに対する鍵は、右では検討をおこなうことなく通り過ぎていた第一章に着目することで得られるように思われる。

この『月と篝火』第一章は全一五段落で構成されており、「数年前——このあたりではすでに戦争がはじまっていた——過ぎたある夜のことが、線路にそって歩いたときに、わたしの心によぎる」という文章で始まる。「ある夜」とは主人公が車の故障によって、野犬が吠え、毒蜥蜴や百足が走り回る「アメリカ」の奥地で過ごさねばならなかった夜を指している。

主人公は荒涼とした平野で独りきりの状態におかれ、その場所に残さ

れた唯一の文明のしるしである線路を眺めながら、いずれ通るのであるう汽車に唯一の望みを託す。時間だけが無為に過ぎてゆき、周囲を包む暗闇や静寂がいつそう増すなか、ようやく主人公が待ちこがれた汽車はやって来る。だが、それは結局、轟音をたて、あたりを巻き込み、主人公の頬を打ちながらまたたく間に走り去っていくのだった。ふたたび平野に暗闇と静けさが戻ったのち、主人公は思う、自分のすぐそばで轟音を立て走り去っていった汽車とおなじような仕打ちをするのが「アメリカ」なのだ、と。

ここに描かれた「アメリカ」が、主人公の不安をさらに掻き立てるデラシネの地の様相を呈しているのは、先に検討した第三章や第二章と同様である。しかしながら、この第一章の最終第一五段落では、次のような場面が描かれている。

さらに夜が更け、犬の太い遠吠えに、わたしはどきっとして目を覚ました。まるで平原全体が、戦場か、あるいは農家の庭先にでもなつてしまったようだった。赤みがかった光がこぼれていた。わたしは寒さにかじかみ、疲れはてた身体で運転台から外へ出た。低い雲の合間から、ナイフの傷口のような細い月が姿をあらわし、平野を血に染めていた。わたしはしばらくそれをじっと眺めていた。本当の恐怖がわたしを襲った。<sup>③</sup>

それまで暗闇に包まれていた平原は、ここでは突然姿を現したナイフの傷口のような細い月明かりで血に染まり、そしてこの光景こそが、主人公に本当の恐怖を与えることになっている。続く文章から章が改まった瞬間には、もう描かれることのない、「月」が照らしだすこの「ある夜」の出来事は、線路にそって歩きたびに思い出されると本章冒頭で語

られているとおり、その後も主人公の心に深く刻まれる体験となった。それにしても、汽車が走り去ってずいぶん経ってから突如姿を現す「月」の光景がなぜ、ここに描かれているのだろうか。あるいはもつと素朴に、主人公はいったいなぜ「月」を見て恐怖に襲われたのか。

この問いに対する一つの仮説は、あたかも一枚の絵のような鮮烈な印象を読者に与えるこの「月」の光景が、「アメリカ」に、根を下ろすことのできない者が抱える不安やデラシネという以上のアレゴリーを加えている、というものである。

本作品にあつては、主人公は基本的に親友ヌートや少年チント、村人と会話を交わし、そのなかで記憶を紡いでゆく。あるいは主人公が過去を回想する場面でも、かつて主人公をとりまいた人々と主人公の会話が想起されている。そのようにして物語は、主人公と他者との対話を通じて進行してゆくのだが、そのなかにあつて唯一、例外的に主人公が孤独の状態に置かれ、他者との会話場面が登場しないのが、この第一章にほかならない。

本来相反する性質のものであるはずの「故郷」と「アメリカ」。このふたつがともに回帰的な世界として語られている、この作品を書き終えた日のことを、パヴェーゼは一九四九年一月一七日の日付のある日記に、こう書き残している。

一一月九日。『月と篝火』を書き上げた。

九月一八日から。二ヶ月たらずだ。だいたい一日に一章。今までで一番の「手柄」である。反応があれば用意はある。おまえの時代の歴史的円環を閉じた。<sup>④</sup>

パヴェーゼは一一月二六日付の日記でもふたたび、象徴的現実を描い



たものとして同作品に言及しているのだが、ここで注目したいのは、九月に執筆を開始された本作品がまだ執筆の途上にあつた一〇月一六日時点の、『月と篝火』という文字がはじめて読まれる日記における、次の一節である。

月と篝火。「大山羊神」のころから予感されていた題名だ。一六年前から。すべてをこめなければ。

ここで何よりも筆者が関心を抱くのは、「大山羊神」と題された詩のことである。パヴェーゼ自身、象徴的現実を描いた作品として『月と篝火』を分類していることはすでに触れたが、次節では、「一六年前」と起源を明かしたうえで挙げられるこの詩の分析をおして、パヴェーゼ自身が『月と篝火』を分類する際に用いる「象徴性」の意味に検討を加えることにする。

## 五、「月」のモチーフ

本節でとりあげる詩「大山羊神」は一九三三年、五月四日から五日にかけて書かれた。当時、パヴェーゼが新たに創設されたエйнаウディ出版社にアメリカ文学翻訳者として携わっていたのは、すでに第二節で確認したとおりである。ただし、彼の仕事は翻訳だけに留まらず、宗教学、民俗学、心理学といった分野の叢書の編集にもおよび、現に彼によってフレイザーやエリアーデなどの著作のイタリア語版の出版が手掛けられた。こうした事実に着目し、パヴェーゼの世界観に決定的な影響を与えたものが神話の認識であつたと指摘するのは、河島英昭である。自身が眺める「丘」にすでに幼少期から神秘性を感じて、そこに独自の神話的

世界を見出していたパヴェーゼではあるが、この神話的な世界の認識は、その後の南イタリアでの流刑体験や、右に記す編集者時代の神話学、民俗学などの研究を通してさらに深められ、のちに神話を主題とした対話篇『異神との対話』（原題 *I dialoghi con Leuco*, 1947）へと繋がっていく。

実際、この神話の認識が深まりゆく時期に書かれた詩「大山羊神」は、野生の雄山羊が月の出に雌山羊や浮気娘の腹を裂くとされる山間農民の伝承を題材としている。全体は三連、四四行で構成されており、第一連では、夏に田舎へやってきた少年が眺める不思議な田舎、雌山羊と娘のイメージが重なり合う光景が描かれている。続く第二連では、夜の場面が変わり、雄山羊が登場する。雌山羊を探しまわる雄山羊だが、月が突如姿をあらわすと事態は一変し、雄山羊が立ち上がって雌山羊の腹を裂く光景が繰り広げられる。そして最終の第三連では場面が朝に変わり、そこには農民が働く姿が描かれる。少年の目をおして見つめられるひとつの場所が、夜には神話的な光景の繰り広げられる場に、そして朝には一転、たくましい農民の世界へと変化するのだが、本節がこの詩のなかでとくに注目するのは、その描写に神話的要素が色濃く感じられる、以下に引用する第二連である。

月が昇ると、雌山羊はすっかりおちつきを失くすが、

雌山羊をあつめ、家へと連れなければならぬ、

さもないと雌山羊が姿を現す。草地を飛び跳ねながら

すべての雌山羊の腹を裂いて、姿を消す。娘らは興奮し

夜、森の中へとたった一人でやって来て、

雌山羊は、草地で雌山羊の泣き声がすると、見つけ出そうと駆け回る。

だが、月が突如姿を現すと、雄山羊は立ち上がり、雌山羊の腹を裂

く。

犬が、月の下で吠え立てた、

雄山羊が丘の頂で跳びはねているのを感じ、

血のおいを嗅ぎとったから。

家畜が小屋で身を震わせる。

なかでもいちばん強い犬が綱を噛み切り、

そのうちの一匹が解き放たれて雄山羊を追い駆ける。

雄山羊は火よりも赤い血を犬にふりかけ酔わせ、

みなが踊る、まっすぐに立ち上がり、月にむかって吠えながら<sup>④</sup>。

雄山羊が登場し、突如姿をあらわした「月」によって雌山羊の腹を裂き、その「血」をふりかけ、「犬」もみな月に向かって吠えながら踊りだす光景。そこに施される描写は、『月と篝火』第二章における、ナイフの傷口のような細い「月」が雲間から姿を現し、平原を「血」の色に染めて、あたりを「犬」の太い遠吠えが包む光景と、酷似しているように思われる。あるいは、両作品の間に一六年の歳月が横たわり、それが作者自身によって鮮明に意識されていることを考えると、『月と篝火』における「アメリカ」の描写、とりわけ第一章中の突如「月」が現れる光景は、かつて憧憬した神話がいままた確信をもって召喚されたものとして読むことができるのではないだろうか。

「アメリカ」における「月」の描写にパヴェーゼの神話的世界を読みとることではじめて、一見するだけでは相反する場所と考えられる「故郷」と「アメリカ」が、実はともに破壊（＝死）と再生が繰り返される回帰的な場所として描かれている、という視点へとたどりつく。と同時にこの視点は、「月」ばかりでなく「篝火」に対しても同様の検討をおこなうことをわれわれに求めるのである。かくして次節では、後者が担う神話的

意味作用について検証されることになる。

## 六．「篝火」のモチーフ

『月と篝火』第二六章後半から第二七章にかけて描かれる、ガミネッタの丘の小屋に起こった火事の場面に着目しよう。かつてアレッサンドリアの孤児院から引き取られた主人公が、パドリーノやヴィルジリアとともに幼少期を過ごしたこの小屋には今、主人公がかつての自分の姿を重ねる、チントという名の少年が、父のヴァリーノとともに暮らしている。この小屋が、ある夜、火事に見舞われ、チント少年が取り乱した様子で主人公とヌートのもとに駆けつける。ここまでの状況が第二六章後半部分で描かれており、続く第二七章では、主人公がチント少年から耳にした火事の詳細について、以下のように綴られる。

今や小屋ぜんたいが燃えあがり、チントは草はらに降りて行くことができなかった。真昼のような明るさの中では父親に見つかってしまうだろう。犬はすっかり狂い、吠えたてて針金を引きちぎっていた。兎が逃げた。雄牛は小屋といっしょに焼け死んだ。

ヴァリーノは葡萄畑に走り、手にベルトを持ってチントを捜した。チントはナイフを握りしめたまま、土手に逃げた。そこにじっと隠れて、木の葉に照り返す火を見上げていた。

そこからでも、窯のそばのように、炎の燃えさかる音が聞こえた。犬は吠えつづけた。土手にいても、真昼のように明るかった。犬の声も他の音も一切聞こえなくなったとき、その瞬間、チントは目が覚めたような気がした。土手で何をしていたのかも思い出せなかった。そうして開いたナイフを握りしめてゆつくりと、火の唸る音と

燃えさかる様子を見つめながら、クルミの木がある方へ登っていった。そしてクルミの枝の下で、父親の足がぶら下がり、梯子が地面に倒れているのを、炎が照り返す光のなかで見たのだった。<sup>④</sup>

チント少年によれば、父ヴァリーノは貧しさからくる怒りゆえに、いっしょに暮らしていた女ロジーナをベルトで執拗に打って殴り殺し、ランプを窓にたたきつけて家に火を放ったのだった。この暗闇のなかで小屋が勢いよく燃えさかる光景の細部としての、「犬」や少年の握りしめる「ナイフ」（かつて主人公が買ひ与えたという設定になっている）、ここに、「アメリカ」を舞台とする第一章中の類似した要素を思い起こさずにはおかない。

すなわち、暗闇に包まれるなかで丘全体が赤々と火に燃える光景と、荒野が月あかりで血の色に染まる光景は、まずはイメージとして類似している。だがさらに、遠くで「犬」が吠えたてるなか、「ナイフ」の傷口のような「月」が突如として姿を現す、となると、それは単にイメージの次元での類似に留まらず、ことばの次元で、より強固に、かつ巧みな関連づけがなされている、と指摘しなければならぬだろう。

『月と篝火』第二十七章における火事は、「篝火」の伝承の現実世界における破壊（＝死）と再生として理解される。<sup>⑤</sup> また、パヴェーゼがこの作品に託した神話性は、故郷の村に伝わる「月」の伝承と「篝火」の伝承、この両者が連動するかたちで作中に提示されることによってはじめて、より十全に捉えうるという点<sup>⑥</sup>、これについてはおおいに強調するに値するものと考えるのである。

## 結

『月と篝火』の終盤に登場する少年チントは、作中、最後まで名を明かされることのない、孤児として生まれた主人公が、幼い頃の自身の姿を重ねて眺める存在という設定を与えられていた。パヴェーゼは、この物語の基盤となる「月」と「篝火」の伝承が現実息づく場面として、一方を「アメリカ」へと渡った主人公、つまりは大人になった主人公が目の当たりにする光景のなかに、また、他方を少年チント、すなわち幼少期の主人公が目目の当たりにする光景のなかに描き出すことにより、過去も現在も分かちがたく展開される神話的世界を表現しようとした。

また、いつの時代も変わらず、世界中で、神話的な世界が繰り返り広げられていくという事態の発見は、ある場所から世界へと飛び出し、ときを経て再びもとの場所へ戻る「帰郷」という設定をとおして、いっそう切実な意味を与えられる。これについては、作中で「私にとって過ぎ去ったのは季節であり、歳月ではなかった」と語られる主人公のこのことばをもつてこそ、「帰郷」という設定をより自覚的にパヴェーゼが用いていたことが証明されていると言えよう。

ところで、本作品では主人公が帰郷以前に身をおいた場所、それが「アメリカ」だった。身をおいても、けっして根を下ろすことの出来ない、デラシネの地にほかならないその場所は、単に「故郷」と対比的な場所として扱われてはいない。現に、「すべてが枯れ草の篝火のなかに消え去って、人々がやり直すほうが良いのかもしれない。アメリカではそうだった…」と、『月と篝火』の主人公は語っている。「アメリカ」と「故郷」を類似した性質のものとして語る、この場面を支えているのは、「ricominciare」＝「やり直す」「ふたたびはじめる」という言葉の使用にも明らかなおおりの、回帰的な時間の流れである。

実際、「月」は一定の周期にしたがって人々の前に姿を現すものである。他方、「篝火」の伝承もまた、麦を刈ったあとに畑の周りで火を焚くと、土がよくなり、水気が多く味のよい収穫が得られるという、農村の時間の流れ、季節のめぐりを軸に展開される。

この回帰的な時間の流れは一方で、パヴェーゼ自身の文学への姿勢そのものを支えてもいる。パヴェーゼは文学者になることを志して以来、アメリカ文学翻訳や流刑体験などを経ながら、数々の詩や短編、長編作品の執筆に一五年余りを費やした。そのパヴェーゼがふたたび文学者になることを志した当初の詩「南の海」に展開した「帰郷」という設定、および詩「大山羊神」に描き出した、農村に広がる伝承を軸とした神話的世界という主題に立ち返って描いた作品が、『月と篝火』である。この作品がパヴェーゼにとって最高の手柄となり、その後の自殺という結末によって、最後の長編作品となった。たしかに、これによって、ひとつの円環が閉じられたのである。

## 注

- ① 日本における二〇〇三年までのパヴェーゼ研究および翻訳書の概要を示したものとして、以下が挙げられる。Yoshio Kyoto, *La fama di Cesare Pavese in Giappone, Un Viaggio Mitico, a cura di Antonio Catalfano, Santo Stefano Belbo, I quaderni del CE. PA. M., 2006.*
- また、二〇〇八年九月より、河島英昭訳『パヴェーゼ文学集成』が岩波書店から新たに刊行されている。
- ② 『月と篝火』についてはすでに河島英昭および米川良夫の両氏による邦訳書が存在するが、本稿では原文をもとに引用者が新たに訳出を試みた。なお、本稿では『月と篝火』の他にも日記や評論、詩、「女ともだち」を引用したが、それらもすべて引用者による訳出である。
- ③ 主人公の名前については作中で明かされることはないものの、かつてモーラの館で働き始めた頃に、周囲の人々からウナギ ('anguilla') と呼

ばれていたことが記されている。ウナギはそもそも、古くから人々に生命力や豊穡の象徴として捉えられてきたとともに、今なおその発生の起源をたどることのできないものである。主人公と、主人公につけられたあだ名とのあいだには、相関性が見てとれる。

- ④ Cesare Pavese, *Il mestiere di vivere, a cura di Marziano Guglielminetti e Laura Nay, Torino, Einaudi, 2006, p. 375.*
- ⑤ *La luna e i falò* については、米川良夫および河島英昭の二人の邦訳者があり、二人がそれぞれ、改訳出版を行っているため、厳密な意味では翻訳書は四種存在する。しかし、ここではそれぞれの最も新しい訳書を指して、二種とした。
- ⑥ チェーザレ・パヴェーゼ(米川良夫訳)『月とかがり火』白水社、一九九二年、二七八頁。
- ⑦ パヴェーゼと都市トリノとの関係性については、ノルベルト・ポツピオ(中村勝己訳)『光はトリノより——イタリア現代精神史』青土社、二〇〇三年に紹介されている。また、パヴェーゼは六歳の頃、父の病死を機にサント・ステファノ・ベルボと呼ばれる農村からトリノへと移り住んだ。この引越しがパヴェーゼにとつていかなる影を落としたかを考察した論文として、伊藤公雄(「男らしさ」の重荷——チェーザレ・パヴェーゼの生と死)、『「男らしさ」のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社、一九三三年所収)が挙げられる。
- ⑧ パヴェーゼ作品のなかで南イタリアを舞台としているものとして、*Donne appassionate, Paternità, Lo steddazzu* (いずれも詩集 *Lavorare stanca* 所収)、短編 *Terra desilio*、長編 *Il carcere* などが挙げられる。
- ⑨ パヴェーゼが『月と篝火』に描く「アメリカ」を不毛の表象として捉えたものとして、Pater, M, Norton, 'Cesare Pavese and the American Nightmare', *The Johns Hopkins University Press, 1962* が挙げられる。
- ⑩ Cesare Pavese, *La letteratura Americana e altri saggi*, Torino, Einaudi, 1971, pp. 285-290.
- ⑪ Pavese, *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 17.
- ⑫ チェーザレ・パヴェーゼ(米川良夫訳)『月とかがり火』前掲書、二七三頁。

- ⑬ 「女ともだち」は一九四九年三月一七日から五月二六日に、『月と篝火』については一九四九年九月一八日から十一月九日にかけて、それぞれ執筆された。
- ⑭ *Tutti i romanzi di Cesare Pavese, a cura di Marziano Guglielminetti*, Torino, Einaudi, 2000, pp. 690-691.
- ⑮ *Ibid.*, pp. 710-711.
- ⑯ *Ibid.*, p. 871.
- ⑰ *Ibid.*, p. 856.
- ⑱ *Ibid.*, p. 870.
- ⑲ パヴェーゼが翻訳、発表した英米文学作品には、ハーマン・メルヴィル『白鯨』、同『スニート・セレーノ』、ジョン・スタインベック『二十日鼠と人間』、シャーウッド・アンダーソン『暗い笑い』、ジョン・ドス・パンス『北緯四十二度線』、同『財閥』、ガートルード・スタイン『アリス・トラスクの自伝』、ダニエル・デフォー『モル・フランダース一代記』、チャールズ・ディケンズ『デイビット・コパフィールド』などが挙げられる。
- ⑳ 和田忠彦「イタリアの中のアメリカ——もうひとつのコスモポリチスム」『ヨーロッパ文化論』京都造形芸術大学、一九九〇年、一六五頁。
- ㉑ Pavese, *La letteratura Americana e altri saggi*, op. cit., pp. 183-186.
- ㉒ *Ibid.*, pp. 187-193.
- ㉓ 注㉑と同。
- ㉔ *Tutti i romanzi di Cesare Pavese, op. cit.*, p. 791.
- ㉕ *Ibid.*, p. 784.
- ㉖ *Ibid.*, p. 786.
- ㉗ *Ibid.*, p. 784.
- ㉘ *Ibid.*, p. 870.
- ㉙ *Ibid.*, p. 813.
- ㉚ ㉚に訳出した引用箇所の後半部分の原文は、*“Anche la storia della luna e dei falò la sapevo. Soltanto, m'ero accorto, che non sapevo più di saperla.”*となっている。㉚の部分には、主人公の「故郷」の伝承との関連性を述べた文章として重要であると考えるが、この最後の一文を、米川良夫は、「ただ」（月と篝火の伝承を）知っていたといふことを忘れてしまったのだ——ということに、わたしは気づいた」（米川訳、一九九二年。括弧は引用者による）と訳出している。これについては *sapevo* と *saperla* の時制の捉え方、また、「忘れてしまった」という表現に違和感を覚える。一方、河島英昭は最後の一文を、「ただ、ほくは気づいていた、もはやそれ（＝月と篝火の伝承）を知っているとは言えないことに」（河島訳、二〇〇八年。括弧は引用者による）と訳出している。ここでも、「もはや知っているとさえない」と完全否定として捉えるべきなのか、疑問を拭えない。よって本稿では、「ただ、それを知っているかどうかはわからない。知らなかったのだ」ということに、わたしは気づいていた」と訳出した。
- ⑳ *Ibid.*, p. 784.
- ㉑ *Ibid.*, p. 817.
- ㉒ *Ibid.*, p. 820. 河島英昭は、チェーザレ・パヴェーゼ（河島英昭訳）『パヴェーゼ文学集成（三）』岩波書店、二〇〇八年、三三九頁にて、この箇所を『月とかがり火』のなかで「もつとも印象的でありながら、理解しにくい場面のひとつ」と述べている。
- ㉓ Pavese, *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 375.
- ㉔ Pavese, *Il mestiere di vivere*, op. cit., p. 378.
- ㉕ *Ibid.*, p. 375.
- ㉖ 注㉑と同。
- ㉗ 河島英昭「叙事詩の精神——パヴェーゼとダンテ」岩波書店、一九九〇年、五四頁—五七頁。
- ㉘ パヴェーゼが流刑囚としてはじめて訪れることとなった南イタリアの風土、人々の営みのなかにギリシヤ的な世界を見出していたことが、流刑地から宛てられた書簡（たとえば、一九三五年八月九日に書かれた姉への手紙）に綴られている。
- ㉙ チェーザレ・パヴェーゼ（米川良夫訳）『月とかがり火』白水社、一九九二年、二七七頁。
- ㉚ Cesare Pavese, *Le poesie*, a cura di Mariarosa Masoero, Torino, Einaudi, 1998, p. 68.
- ㉛ *Tutti i romanzi di Cesare Pavese, op. cit.*, pp. 875-876.

④② パヴェーゼには、「火事」と祭りの夜に丘で焚かれる「篝火」を同一のものとして捉えている作品が、他にも存在する。たとえば短編「海」(原題 *Il mare*、一九四二年、*Rerica d'Agosto* 所収)では、主人公とその友人ゴストが、火事の現場を目にし、「篝火だ！ 篝火だ！」と興奮する場面がある。

また、『月と篝火』のなかで「篝火」のもつ破壊力がもつとも象徴的に示されている箇所として、物語の最終局面、第三二章におけるサンティーナの死の場面が挙げられるだろう。主人公がかつて憧れの目差しで見つめていたモーラの館の三女サンティーナは、戦争のさなか、二重スパイを働きながら多くの男性の目を惑わした。死んでもなお男を魅了する可能性があったことから、美しいサンティーナはその死体をまるで篝火を焚くようにして焼き尽くされねばならなかった。その場所については、「去年まで、

篝火を焚いたような跡が残っていた」と、ヌートの口から主人公に伝えられている。

④③ 本作品の題材となった「月」と「篝火」の伝承は、「月」の現れが不毛へ導くものであるのに対し、他方の「篝火」は豊穡へと導くものである。このことは作中、突如不気味な「月」が姿を現す光景が「アメリカ」に、他方の「篝火」(＝火事)の場面が「故郷」に、展開されている点と無関係とは言えない。ともに破壊(＝死)と再生を繰り返しながらも互いに異なる方向性へと向かう両伝承が、現実的な光景として作中に描かれる際に、同じモチーフを用いて描き出されている点、ここに、パヴェーゼの思い描く神話的世界を、より明白に見てとることができる。

④④ *Tutti i romanzi di Cesare Pavese, op. cit., 2000, p. 814.*

(本学大学院博士後期課程)